

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著
来住道子／訳

世界を驚かせたアン・パッカーと日本製品

同じようなことは当時、一九六四年の東京オリンピックに出場した女性たちにもいえることだった。二〇二〇年の東京オリンピックの出場枠の男女比がおおむね半々近くになってきているのに対し、一九六四年の東京オリンピックでは総勢五一五一名の出場選手のうち、女性は一三パーセント（六七八名）ほどにすぎなかった。

アン・パッカーは、陸上女子四〇〇メートルに出場したが、決勝でオーストラリアのベティ・カスバートに僅差で敗れた。それでも銀メダル獲得を喜び、銀座でのショッピングを気ままに楽しもうと思っていた。彼女の中でのオリンピックは終わっていたのだ。パッカーの婚約者でイギリス代表チームの主将だったロビー・ブライトウェルは、彼女があまりにのんきなのに驚いた。ショッピングに行きたい気持ちをひとまず抑えれば、彼女はきっと歴史に名を残すことになるはずだ、と自叙伝の中で書いている。

「明日の八〇〇メートル、出るべきだと思う？」とアンは尋ねた。「明日はそんなことよりショッピングに行こうと思ってるんだけど」私は啞然としてしまった。「ショッピング？ 何を考えてるんだ！ ショッピングだって？ オリンピックなんだぞ！ モールスフォード村のスポーツ大会じゃないんだぞ！」

「わかってるわよ。でも、銀メダルの上を目指すなんて、私には無理よ。それにみんなのお土産も買わなきゃいけないし」

「バカなことを言うな！」私は思わず声を荒げた。「イギリスには、君のいる場所に立ちたいと必死に頑張っている選手たちがいるんだぞ！」

アンはきまり悪そうに笑った。「わかった。私、走るわ。出場しても何かが大きく変わるわけじゃないし。負けちゃったとしても、そのあとショッピングに行けばいいものね」

後からわかることだが、彼女の金メダルはまず間違いのないという兆しが表れていたことに、本人はもちろん、おそらく婚約者のブライトウェルでさえもこの時は気づいていなかった。パッカーはまずまずの結果が残ればそれでよかったが、周囲からは彼女の調子やその余裕の走りから金メダルは確実だと見られていた。パッカーが予選を勝ち抜いて決勝の準備をしていると、経験豊富な尊敬すべき二人の人物が力強い激励の言葉をかけにきた。そのときの様子については、やはりブライトウェルの自叙伝に書かれている。

ミルカ・シンは一六〇〇メートルリレーのメンバーと一緒に走っていた。アンを見つけると、駆け寄ってきて彼女の両手をつかみ、いかめしい顔つきでじっと見つめながらこう言った。「アン・パッカー、いいか。君は勝てる！」アンは照れくさそうに笑うと、私のほうをちらっと向いて可笑しそうにっこりしてみせた。ミルカ・シンは握っていた彼女の両手を力強く振ってさらにこう言った。

「よく聞くんた、アン・パッカー！ 昨日、君の準決勝を見せてもらった。実に余裕のある走りをしていたね！ 決勝が終わったら、金メダルを見せにきてくれ」

アンは丁重にうなずいた。ミルカ・シンがその場から立ち去るとすぐに、今度はベティ・カスバートのコーチ、パーシー・セルッティが駆け寄ってきた。二人は初対面だったが、パーシーは堅苦しい挨拶をするようなタイプではなかった。彼はアンに向かって立てた指を振って見せながらこう言った。「こんなチャンスはまたとないぞ。周りからも注目されている。いいか。ベティとも話したが、ぎりぎりまで集団で固まって、最後にスパートをかけて一気に抜き去るんだ。いいな？」アンはあっけに取られて無言でうなずいた。セルッティは言うだけのことを言うと、現れたときのようにあっという間にいなくなっていた。

パッカーは金メダルを決めると、すぐにスタンドに向かい、ブライトウェルの腕の中に飛び込んだ。ミルカ・シンもその場において、予想通りの結果に終わって満足げに微笑んでいた。「君の婚約者は勝って言っただろ。僕の言うことなんか信じちゃいなかったけど。言った通りじゃないか！ いひひひひ！ ブライトウェル、君は僕の言うことなんか聞きやしないからな！」

パッカーは八〇〇メートルの経験はほとんどなかった。しかし、それは他の選手たちも同じだった。二〇世紀前半まで、IOCは負荷がかかりすぎると考えられる競技には女性を参加させないという方針をとっていた。そういうわけで一九二八年に実施されたが、それ以降、オリンピックには女子八〇〇メートルという種目がなく、正式に認められたのは一九六〇年大会からだった。

その結果、八〇〇メートルという距離を経験していた女子選手はほとんどいなかった。パッカーもどいうペースで走ればいいのか見当がつかなかった。それでも、何も知らなかったことと短距離選手だったことが功を奏した。パッカーは、レースの大半は集団の後方につけていた。だが、残り二〇〇メートルのところで順位を三位に上げ、一気にスパートをかけてトップに立ち、そのまま逃げ切った。ふたを開けてみれば、世界記録での金メダルだった。パッカーはのちにこう語っている。「何も知らなかったのがよかったのね」

一九六四年のころ、新興経済国だった日本は、八〇〇メートルを走ったパッカーと似ていた。新たな目標には、新たな挑戦がつきものだ。初めから先行きの見通しがつくわけではない。解決すべき問題が生じれば、あらゆる手を尽くし、得られる支援は何でも活用し、世界から学ぼうと努めた。

トヨタの有名なジャストインタイム（JIT）という無駄のない生産方式は、品質と効率性を最大限に高める優れたシステムとして世界中に認められ、日本企業が先頭に立って自動車産業に革新をもたらすきっかけとなった。デトロイトのアメリカ大手自動車メーカーのように、車のドアを何週間も使わないまま損傷の危険にもさらしながら倉庫に大量の在庫として抱え込むのではなく、日本のエンジニアは不足分を補う方法をとった。

戦後の数年間は物資が乏しく、活用できる資本もほとんどなく、ひと月もふた月も在庫を抱えて資金を「無駄にする」ことはできなかった。そこで、パーツは必要な分だけ作る——ジャストインタイム方式をとった。資金は有効に使われ、パーツが何週間も放置されて傷むこともない。生産ラインにつく誰

もが、無駄をなくし、品質を向上させるためならあらゆる手法を取り入れていくことに努めるよう指導された。

そういうわけで一九六四年にはもはや、日本製品は安かろう悪かろうという粗悪品ではなくなり、海外からのオリンピック選手たちを驚かせた。日本製品は最先端をいていた。

パッカーとブライトウェルは、世界初の民間ジェット旅客機であるブリティッシュ・オーバーシーズ・エアウェイズ・コメットで他の代表選手たちとともに東京にやってきた。二人はコックピットに行き、パイロットと話す機会があり、日本のことを尋ねた。ブライトウェルは旅の経験豊富なパイロットに日本で買い物するなら何がいいか、おすすめどころを訊いた。

パイロットはこう答えた。「セイコーの時計ですね。日本製の時計は素晴らしいですよ。ムービー・カメラもいいですね。テープレコーダーもおすすめです。トランジスタラジオも一つは買うべきですね。それからカメラもね。ああ、眼鏡をおかけになるんですね。それならコンタクトレンズにしてもいいんじゃないですか」

そこで私は早速、東京の眼鏡屋に行ってみた。するとなんと、翌日にはコンタクトレンズが手に入ったのだ！ 日本製のコンタクトレンズはすでにガス透過性だった。素晴らしかった。おかげで最初のレースからトラックがよく見えた。

すごいと思った。日本の重工業技術のことは知っていたが、アメリカ製のトランジスタラジオやコンピュータが日本でどう活かされているかについては何も知らなかった。付加価値が高く、技術的にも優れた製品に進化していることがわかった。

ブライトウェルは、イギリスのマスコミ関係者と親しかったが、その中にはBBCスポーツの人気キャスターのデイビッド・コールマンもいた。東京にいる間、コールマンとよく話していたのは、オリンピックのテレビ放送における日本の技術力の高さがどれほどすごかったかについてだった——たとえば、このオリンピックは世界に衛星中継された初の大会となったということ。国立競技場に設置された中継カメラは、BBCが二台だったのに対し、日本は数十台にのぼった。プレスルームの報道関係者には、コンピュータによって集計された競技結果が提供された。イギリスでは大半がテレビは白黒放送だったが、日本の多くの家庭ではオリンピックをカラーテレビで観戦していた。

「相対的にたとえるなら」とブライトウェルは言う。「私たちはまだ蒸気機関車に乗っていたということだね」



1964

——日本が最高に輝いた年

敗戦から奇跡の復興を遂げた
日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ / 著

Roy Tomizawa

来住道子 / 訳

Kishu Michiko

今に続く日本人の心を 形づくったドラマ

国際社会へ本格復帰を果たした当時の日本を
日系アメリカ人ジャーナリストが描く

文芸社◎定価(本体1,300円+税)